

多重被災と「笑い」

水害常襲地の京都府福知山市の事例から

福知山公立大学 地域経営学部

准教授 大門大朗



1. はじめに

本稿では、何度も被災した経験を笑いとともに語るこの意味について、事例を通して考察する。このように書くと、「被災経験を笑うとはいかがなものか」、「被災者の気持ちを理解しているのか」、「被災を何度も経験したことがないから言えるのだ」など、様々な批判があることは想像に難くない。本稿で考えたいのは、当然、被災経験を嘲笑することでも、災害を笑いによって乗り越えろと主張することでも、複数の被災を受け続けることを正当化することでもない。

本稿では、それらの問いの前提そのものに対して、事例を通して改めて疑問を投げかけたいと考えている。すなわち、何度も被災を経験する当事者は、なぜ自身の被災経験や体験を笑いを交えて語るのか、そして、私たちはなぜ災害を語る際に笑いの形式を避けるべきものだと考えてしまうのか、本稿では、この問いを前景化する。その意味で、本稿は、笑いを通して災害を語るべきだと主張するものではない。複数の被災経験をなかで、「笑い」という新たな表現の形式が生じていることを描き、その意味を通して被災経験を理解するあり方を問い直すことを目指すものである。

したがって、本稿が焦点を当てる「笑い」は、災害経験に新たにポジティブな感情を見出そうとするものではない。むしろ、本研究でいう「笑い」は、被災による悲しみの経験と表裏一体のものではないかと考えている。仮に笑いと悲しみが表裏一体であるのであれば、これまでの実践や研究群においてそれらがなぜあまり語られなかったのかを問いかけようとするものである。

当然、本研究は、複数の被災経験が生み出す悲嘆や情けなさといったネガティブな感情が被災者に生

じることも、そうした経験の切実さを否定するつもりは毛頭ない。本研究で取り上げる被災地——京都府福知山市——においても、当然、すべての被災住民が語りを「笑い」として表現しているわけでもなければ、ある被災住民が笑いを交えて話すことがあったとしても、その住民が常に笑いを織り交ぜて災害経験を語っているわけでもない。しかしながら、本稿で紹介していくように、複数の被災を経験してきた住民らが、深刻な経験とその喜劇的側面を、間断なく滑らかに往復しながら語っていることも事実である。

本稿では、複数の水害を経験した被災地区や被災住民の語りの形式に着目し、「笑い」がどのような形で現れているのか、災害常襲地である京都府福知山市での事例を記述することに主眼を置く。そして、多重被災による語りの一つの形式として、「笑い」という語りの形式を描き出し、多重被災の意味を再考することを企図している。

2. 水害の多重被災地としての福知山

本稿では、多重被災を経験してきた京都府福知山市を事例に取り上げる。京都府福知山市は、京都府北部に位置する人口約7万5千人の町であり、一級河川である由良川およびその流域において、度重なる水害に見舞われてきた。福知山市では、近年だけでも大規模水害として、2013年（平成25年）台風第18号、2014年（平成26年）の豪雨、2017年（平成29年）の台風第21号、2018年（平成30年）の西日本豪雨、2023年（令和5年）の台風第7号によって、外水・内水氾濫、土砂災害などによって住宅の全壊や大規模半壊、浸水が多数発生した。

また、本研究のフィールドの中心地の一つでもある

福知山市大江町においては、昭和 26 年に大江町へと合併されてから 75 年間で被害の程度の差はあるものの 50 回の被災を経験している。また、今回、フィールドワークを実施した後の 2023 年にも、令和 5 年台風第 7 号（以下、単に台風 7 号とする）により、福知山市大江町を中心として、短時間の豪雨により（総雨量 376mm、時間最大雨量 114mm）、中小河川の氾濫や土砂崩れ等によって、全・半壊 12 棟、床上・床下浸水が 100 棟を超える被害が出た¹⁾。

著者は、所属大学の位置する福知山市において、2023 年 4 月から 2026 年 6 月現在まで、継続的に地域でのフィールドワークを実施し、地域のイベントや防災の取組み、2024 年の水害後の被災地での調査や支援活動を行ってきた。特に、大江町エリア（主に大江町蓼原地区）や、福知山市内の複数の地区（城山地区、筈巻地区等）での参与観察およびアクションリサーチを継続している。以下では、これらの研究活動におけるフィールドノートやインタビューのデータから、地域においてどのように水害が位置づけられているのかを示す。その中でも、多重経験と語り（床上浸水、タバコが切れた、国道 55 号線、泥出しのコツ）、被災経験と教訓（艮の風、スズキのバイク屋）の 2 つの観点を軸に記述する。

3. 多重被災と語り

（1）床上浸水の経験—「もう少し水が来ていたら床上（浸水）やった」

福知山の住民は、水害のことを「水浸き（つき）」と呼んでいる。水がじわじわと浸されるように地域に入ることから、そのように表現されている。それは、堤防決壊のように水が押し流されて起こる一撃というよりも、繰り返し何度も水がやってくるものというニュアンスで語られている。住民の語り口からも、水害は異質なものであるというよりも、むしろ「時折起こるもの」として受け止められていることがうかがえる。

水害を過去数十年で三度経験した蓼原地区のある住民の方にお話を伺っていたところ、近所の別の住民

の話を教えてくれた。子どもを大学に通わせるために、たまたま水害保険を解約してしまい、その直後に被災してしまったというエピソードである。話を終えると、その方は、「これ（被災するかどうか）は、運やな」と付け足した。ここで言う「運」とは、水害そのものの発生ではなく、水害によってどの程度被害を受けるかという「程度の問題」であるという。その方も、やはり備えの重要性を強調しているが、一番大切な備えは、物資よりも貯金と保険だという。特に保険は、「農協（の保険）が一番ええ。建物共済もあるし、良い職員がいてスピード感がある。すぐ見に来てくれる」とのことだった。何度か保険を活用したのか、地域の方の評判を聞いてか、農協が提供する保険の信頼を強調していたのだった。

また、その方は、次に、過去の自分の水害経験を思い出しながら、「10 年前はここまで来た」と腰のあたりを指さし、水位を再現してくれた。大変な経験を想像し、恐る恐る伺うと、意外にも返答は「もうちょっと（水が）こい、こいこい」と願っていたというものだった。なぜなら、畳の上まで水が上がれば高額保険金が支払われるが、床下浸水では出ないからである。当時は、その方は、高額保険金が出るタイプの保険に切り替えており、「どうせ被災するならその方がええ」と笑いながら説明してくれた。結局、被害は床下浸水にとどまったため、「もうちょっとやった」と、浸水高と床上までの差を指で示しながら、どこか残念そうに水が引いていったことを語った。そして、「水害の保険はどれだけかけても、一番高い金額の保険しか出えへん」と著者と同行していた学生に、保険の教訓について忠告を添えつつ、「床『下』の方が可哀想や」と最後には付け加えるのだった。

（2）孤立経験と優先順位—「タバコが切れた」

由良川の漁業組合の関係者の方が、大学生に由良川の魚や自然を説明している際のことだった。その方は、由良川には、テナガエビや鮎など多くの水産資源があり、自然が豊かであると自慢げに話していた。由良川には遡上してくる様々な魚がおり、小さい時はそうし

た魚をよく取っていたこと、そして、かつては水運が盛んであり、塩や海産物を福知山から京都へ向けて運んでいったこと、そして、そうした自然の豊かさや地域の魅力を広めたいと語ってくれていた。

そして、由良川の話は、自然の恵みだけでなく、水害の話題にも自然と展開していった。自身が生まれ育った大江町のある地区は、宮川という由良川水系の川の合流地になっており、水害が発生すると周辺は水浸しになりその地域だけが常に孤立して離れ小島のようにになってしまうという。その方は実際に、中学校2年生のとき、大規模な水害が発生し、実際に2日間ほど孤立していたことがあったという。

その方は、当時のことで覚えていることがあると続けた。地域の老人から「船を出してくれ」と、水害の際に避難や救助のために使っていた舟を使って町の方に行くよう命令されたのだった。「それでなんでや」と子どもながらに思っていると、『タバコが切れたからや。タバコがないんや』ということで。なんやそれは」と私に行けというのかと思ったと笑いながら答えるのだった。

その話の後、少し間をおいて、「洪水があったけれども、洪水があったおかげで、水がついてもカイコが食べられる桑が育つ肥沃な農地があった」とその方は続けた。そして、それを逆手に取ってたくましく生きてきた祖先の方への誇りを示すとともに、その魅力を伝えたいと思うと語りかけてくれたのだった。

（3）いつ逃げるのか―「誘導員がいなくなったらそろそろまずい」

市内の城山地区からは、私に声がかかり、自治会やまちづくり協議会の役員が集まり、地区防災計画の策定に向けたワークショップを一緒に開催することになった。この場では、要配慮者の避難支援が大切だ、子どもたちが参加しやすい訓練にすべきだ、避難時のフローを整えるべきだ、大雨の際にどの道から避難できるかといった、いわゆる「防災らしい」話題が1時間半ほど続いた。そして、その司会を私自身が期待されてもいた。

参加者も徐々に疲れが見え始めた頃、私は「この地域には、昔から住んでいる方が多いのでしょうか」と、少し緊張を解すために問いかけてみた。すると、それをきっかけに、住民たちは、堰を切ったように昔の水害の経験を語り始めた。

あるときの水害で、水に浸かった目の前の道を突っ切って避難してくる住民がいた。全身が泥だらけでひどく汚れており、「いやあ、大変ですね」と心配して声をかけたところ、「で、誰が水から上がってくるかと思えば、親父やった」と実の父親だったという。心配するどころか、他人に迷惑をかけないか気になったそうで、この話には周囲からも「そりゃそうやな」と笑いが起きた。さらに、4回も5回も水害を経験したという年配の住民が、「子どもの頃はよう水がつきよった。堤防もないから。水がついたら、『今日は小学校は休みや』言うて、みんな網持って魚とりよったわ」と、また別のエピソードが出るのだった。先程の避難のためのワークショップの時間とは打って変わり、様々な被災経験が生き活きと飛び交っていた。

こうした流れを受けて、私は、「皆さんはどういうときに避難するのですか」と避難の判断のタイミングについて考えてもらおうと、あえて閑話休題とものテーマへと誘導してみた。すると、話題は「誘導員」に移った。この集落の由良川沿いを走る府道55号線は、大雨の際に冠水しやすい低地に位置しており、車両を大雨で通行止めにする際には、誘導員が立つことになっているという。私は、誘導員が来るのが早期の避難の目安になると思い、それは、よい避難の目安(避難スイッチ)になりそうだと期待を込めて話してみた。

しかし、住民から返ってきた答えは「それではまだ避難しない」と意外なものだった。では、いつ避難するのかと尋ねてみると、誘導員が現地にいるということは、まだ誘導員が、その場所にとどまっても大丈夫な段階であるというサインだという。そして、その誘導員がいなくなったときが、「いよいよ本当にまずい」というメッセージになるのだという。住民の一人は、半ば冗談で笑いながらこう語った。「(府道)55号線

の車の誘導の人がおらんようになったら、『そろそろやばい』といってみんな避難するわな」。そういつてまた笑いが起こるのだった。

（４）逃げない理由―「泥出しは水がさがるとき」

「一階には何も置かへん」、と語ってくれたのは先ほどの大江町蓼原地区の住民である。一階にはタンス以外には、すぐに持って上げられる最小限のもののしか置かないようにしているという。大雨が近づいてくると、地域であらかじめ決めている車の避難場所に、車を移動させることになっている。かつては、位牌と米だけもって二階に上がっていたそうである。この方は、能登半島地震の被災地の様子をテレビで見ながら、「自分たちも災害に遭ってきたから、大変さはわかる」と語る一方で、「テレビでやってるのを見ると消してしまおう」ともおっしゃっていた。過去の記憶が呼び起こされるのかもしれない。

ただ、その語り口からは、水害が単なる「被害」としてだけ捉えられているわけではないこともうかがえる。例えば、「災害があったら家が片付く」と語るように、災害を期に家財の整理が進むという、ある種の実利も語られていた。同じ地域に住む別の住民も、災害でびっくりすることがあったと前置きして、「前の災害であれだけゴミが出たのに、数年しか建ってないのにまだ出るんか」と話してくれた。そして、そういう自分も同じように災害ゴミを出しているから一緒だと冗談交じりに話してくれた。

このように、水害に見舞われた際には、泥が乾く前に素早く家を片付けることが何よりも重要だという。もちろん、水害によって様々な家財を処分しなければならないが、それとともに泥出しも過酷である。そのため、「なぜ避難しないのか」という問いに対しては、「水が引くときに泥も一緒に出さないと後が大変になるから」という実践的な理由が返ってくるのである。災害時には命を落とさないようにすることが第一なのはもちろんだが、その後に控える片付けという現実を少しでも軽減するためには、避難しないという生活の知恵が受け継がれているのだとも気付かされた。

4. 被災経験と教訓の間の緊張関係

（１）令和５年台風７号と良の風―「前ばかりみとったんです」

令和５年の台風７号の災害は、これまで何十回も被災してきたこの地域にとっても、これまでにない新しい災害となった。「前ばかりみとったんです」と語ったのは、蓼原地区の先程の住民である。その方は、本川である由良川の水位や台風の進路を注意深く確認し、台風が最接近する翌朝には高齢者の避難支援を行うつもりで、前日の夜は早めに就寝していたという。しかし、実際に激しい雨が降ったのはその「最接近」の前夜だった。線状降水帯がこの地域にかかり、１時間に１１４ミリという局地的な大雨を記録した。２３時半ごろには、地域の道路はすでに川のようになっていた。避難指示が出されたのはちょうどその頃であり、すでに避難自体が危険になりつつあるタイミングだった。しかも、これまで注意していた由良川ではなく、裏山の小河川や沢から土砂崩れや洪水が発生していたのである。「前ばかりみとったんです」という言葉は、これまでの災害への備えである由良川の水位上昇ではなく、想定外に裏山から被害が発生するという驚きと無力感が入り混じっていたものだった。

このような局所的かつ集中的な豪雨の被害を受けて、大江町では、発災から２週間後の９月１日、大江まちづくり住民協議会の呼びかけにより、被災した全ての地区の自治会長が集まることとなり、それを聞いた福知山市職員や大学関係者らは住民らがそれほど集まるのであればと半ば後追的に参加する形で振り返りの場が設けられた。この会では、住民自ら、当時の大雨の状況説明や、自治会長に対して行われたアンケート結果が報告され、その後、自治会長からのコメントが続いた。「地域の人は寝ていて、避難するどころではなかった」「数時間でこのような被害が出るのか」といった驚きの声や、「倒壊した家に助けに行ってなんとか救出した」といった証言もあった。市役所からは、被災者支援の補助金・交付金制度の説明があり、「今後の局所的豪雨に対して備えていこう」

という前向きな雰囲気も感じられた。

だが、その後の質疑応答では、空気が一変した。地域の中でもとりわけ被害が大きかった自治会の会長が、憤りをにじませながら次のように訴えたからである。「民営地には（行政は）入れないと言われた。（中略）事実、できないんですよ。どうすることもできない。大型ダンプで土砂を運び出すなんて、自治会ではできない」。市からの提示された 30 万円の交付金では、土砂の撤去にはまったく費用が足りないという現実があったからであった。その方は最後にこうも語った。「（今回被災した人は）かわいそうですけど、もう仕方がない。なんと恨まれようと……水が来ることはしょっちゅうあるんですが、今回の災害は、水害以上の災害でした」。それは、この災害を地域の努力だけでは「教訓」にできないという諦めとともに、外部からの支援の必要性を訴える声でもあった。

その数日後、私は改めて大江町を訪れ、その振り返りの会で司会をしていた住民と話す機会を得た。その方は、私が地域の公会堂に着くと嬉しそうに、明治時代の新たな資料が見つかったと取り出して見せてくれた。「今回の土砂崩れがおきた場所と、明治期の土砂災害の場所が一致していたんや」ということだった。さらに、昔からこの地域に伝わる「艮（うしとら）の風に気をつけろ」という伝承と、台風 7 号が接近してきた日の風向きが艮の方角だったことを結びつけ、「たまたまではない」というのだった。

もちろん、確かにそれは後知恵でもあるかもしれない。しかし、この台風 7 号による災害は、過去にもあった被災と同じ箇所で起こっており、決してまったく新しいものではないことを過去の資料は暗示していた。その後、過去に作成していた地域版のハザードマップの中に赤色のバツ印が書き込まれ、さらに自治会主体で 2 つの石碑が建てられることとなった。それはどちらも今回、地域の歴史の中に、土砂災害が起きた場所を記録し、位置づけるための実践であった。

（2）物語としての備え—「スズキのバイク屋」

台風 7 号の被災後、蓼原地区を住民の方とともに

歩いていたときのことである。地区内には、最も低い場所に浸水センサーが設置されており、住民がその情報をモニターできる仕組みになっていた。低いところから浸水が始まるという前提に立てば、センサーは合理的な避難判断の手がかりになると考えられる。そこで私は「これは避難判断の材料になって良いですね」と尋ねてみた。すると、返ってきた答えは「正直、こういうのは地域の人は信用しとらんのや」という意外なものであった。設置に関わった大学の立場からすれば、やや落胆を覚える返答だったが、別日に改めて「地域の人は何をきっかけに避難するのか」と避難のきっかけを尋ねると「スズキのバイク屋さん」との返答であった。

このスズキのバイク屋は、地域の防災マップ（マイマップ）にも明記されており、避難の判断の目安（いわゆる避難スイッチ）として住民に知られているという。確かに、浸水センサーの情報も役に立つが、それだけでは実際に避難しようとは思わない、という。一方で、スズキのバイク屋にとって、商品であるバイクが水没すれば売り物にならない。そのため、浸水の兆候があれば、店主はバイクを 2 階に上げるなどの対応を取る。だから地域の人は「スズキのバイク屋が動き始めたら危ない」と認識しており、それが避難のきっかけになるのだという。そしてそれは、地域で作っている防災用の SNS（オープンチャット）を使って、実際に発信される。それがどれほど地域住民に共有されている避難のトリガーになっているかはさらなる検証が必要であるが、住民にとっての避難の目安は、浸水センサーなどの最新機器よりも、住民がイメージしやすい状況が活用されている実践であった。

5. 繰り返しの災害経験と笑い

床上浸水の方がありがたい、誘導員がいなくなったら逃げ時、避難したら泥出しが大変になる——こうした語りは、被災や避難の「常識的な」理解とは一見相容れないものであり、その例だけ採り上げればどこか笑い話のようにも響くかもしれない。このことは、表

面的に見れば、確かに、複数回被災を経験することを笑いでもって地域が受け入れるローカルな知の存在を暗示しているようにも思われる。

だが、これらの語りの形式を十分に理解するためには、その裏面とともに理解しなければならないように思われる。その裏側には、たとえば、床下浸水による制度的な支援や保険適用の差、それによる地域住民間で得られる支援の格差、そうした経験がなければ、決して「床下のほうがよい」とは語り得ないはずである。泥出しや家財廃棄への労苦、家財の再購入と再被災による再処分といった復旧の困難や、迅速な復旧の重要性を認識していなければ、逃げない判断や災害ゴミの量への語りは生まれえないはずである。その笑いの裏面には、多重被災による復旧の苦労への切実な物語が含まれてもいる。

それにもかかわらず、その語りは、深刻な水害の労苦と切り離されることなく、いわば笑いと言苦は編み込まれる形で軽やかに表現されてもいた。ここでいう「笑い」の効果は、周囲には吐露しにくい災害時の労苦や落胆を、何度も被災を経験してきた当事者や、その周囲の人びとに共有できる形式として繋ぎ止めることにあるように思われる。

一方で、被災経験は、単線的に笑いの形式に結びついているわけではない。令和5年台風第7号がもたらした新たな局面の災害に対して共通の教訓を得ようとする振り返りの場では、それを異質なものとして語る、言い換えれば、地域の手には負えない例外的な出来事として、支援の必要性を強調する場面が見られた。当然、被災後2週間で被災自治会すべての自治会長が一同に会して、住民主体で振り返りを行うという事実自体が注目すべき実践である。しかし、そうした新しい災害経験は、地域にとって必ずしも「これまでの物語」の延長線上に自然に位置づけられるものではなかった。

そのように考えれば、ある住民が、今回の土砂災害と明治期の災害の被災場所が一致していたこと、そして伝承として語り継がれていた「艮の風」が今回も吹

いていたことに安堵を示したのは、災害を異質なものとして排除するのではなく、自らの地域の歴史と地続きのものとして受け入れられるという希望や期待の現れだったとも捉えることができるのではないだろうか。もちろん、今回の台風7号による急激な大雨による土砂災害の経験は、未だ十分なユーモアをもって語られるべきではないだろう。だが、萌芽的であるにせよ、地域のひと続きの物語として、過去の資料を参照し、ハザードマップへの記入や石碑の建立を通して記録を刻むことによって、新たな災害を引き受けようとする地域の動きは生まれつつあった¹⁾。

このようにユーモラスに語られる被災経験は、単に過去を懐かしんだり、教訓として振り返るための語りにとどまらず、防災の実践としても機能している。たとえば、地元の商店——「スズキのバイク屋」の動きを「売り物を守るという意味で本気に違いない」と語り直すことで、住民は避難の「きっかけ」を位置づけようとしていた。それは、浸水センサーのような外部者の設置した科学的装置よりも、地域で共有されている物語の方が、避難行動を促すと地域住民がみなしていることを示している。

これらを総合すると、多重被災を経験した地域住民は、災害という地域にとって「異質なもの」をその地域に取り込み、地域の物語として消化しようとする実践を笑いという形式を用いて遂行しているように思われる。それは、災害を例外的な出来事として「吐き出す」のではなく、むしろ積極的に「消化する」あり方である。そして、その過程は、苦悩と一体化されたユーモアの要素を伴いながら語りとして表出される。つまり、災害を異質な例外として処理するのではなく、受け入れ、咀嚼し、時には嘔吐しながらも消化していくこと——こうした態度の中に、災害を例外的なものとして排除しない地域の知恵として、「笑い」の要素が宿っているようにも思われる。

6. 多重被災に対する3つの問い直し

ここまで多重被災地における「笑い」が持つ意味に

ついて、福知山の事例を通して検討してきた。確かに本稿で扱った事例は福知山という一例に過ぎないが、この事例は、多重被災における論点について浮かび上がらせる上で少なくとも 3 つの論点を提起しているように思われる。

第一に、災害を特異かつ突発的な事象として扱うことの陥穽である。ここで取り上げた多重被災地では、災害は突発的な出来事ではなく、生活の連続性の中に繰り返し現れる経験として位置づけられている。こうしてみると、例えば、「災間」という概念は、大災害と来たるべき災害との間の日常を捉えようとする重要な概念である一方で、災害を日常とは切り離された異質で例外的な時間として捉えようとする傾向がある。その他にも「物語復興」のようなアプローチでは、地域にとって受け入れがたい何らかの異質な経験を「新たな」語りとして語り直すことで、復興の未来を描いていた。こうしたアプローチや態度は、多くの防災や復興の実践において有益である一方で、災害を非日常的かつ例外的な出来事と前提してしまっている。

しかしそれらは、地域が繰り返し例外的な出来事に直面する多重被災の場合、災害からの復興を描くうえでは地域住民にとっては困難を極めるかもしれない。このことは、多重被災を前提とするならば、災害を一回限りの例外的な「出来事」とみなすだけでは不十分であることを示唆している。むしろ、被災、復旧、生活の再建、次への災害の備え、そして、(本来は防がれるべきではあるが)再被災が繰り返される生活の中にある一連の「プロセス」として災害を捉える視点が必要であるように思われる。そしてそのようなプロセスの中で形成される語りの一形式として、本稿が扱ってきた「笑い」も理解されるべきであると思われる。

第二に、これまで災害伝承や復興研究が見落として来た被災経験の領野 (e.g., 笑い) をどの程度包括的に理解するべきかという論点である。このことは、被災という極めてセンシティブな経験を踏まえれば、軽々しく扱われるべきものではないということは強調してもしすぎることは無いだろう。しかし、本事例

でも繰り返し強調してきたように、ここでいう「笑い」の要素は、決して軽々しいものではなく、何度も被災を経験する中で、例外的な状態をくぐり抜けるための知恵として、どうにかこうにか地域の一部として取り込もうとしてきた住民たちの狡知としたたかな実践と解されるべきではないか⁽²⁾。しかしながら、「笑い」という領野以外にも、被災経験において語られなかった領野に何があるのか、あるいは、社会的な要請(「災害を忘れない」等)によってどのように特定の語りが形成されてきたのかについても改めて目を向ける必要がある。

第三に、多重被災を近年の新たなフェーズとしてみなそうとする姿勢に、多重被災における笑いの形式は警鐘を鳴らすものかもしれない。言い換えれば、ここで見られた笑いの形式は、新たな発見というよりも過去の再発見であるといった方が正確ではないかと考えられるからである。近年、被災経験が増加していることが知られているが、近代的な防災技術が確立する(明治から昭和初期)までは、特に洪水のような災害は、今まで以上に頻発していた。そして、水害は大きな被害をもたらすだけでなく、その地域にとって水運や地域の発展など、多くの恩恵をもたらすものとしても見られてきた(事実、福知山市、特に大江町は、北前船の恩恵によっても発展してきた町でもあった)。そうした被災と恩恵の繰り返しの中で、地域住民は、復旧・復興あるいは防災上の工夫や知恵を育んできたはずである。このことは、近年になりやっと体系的に議論が進展してきた災害研究の領域が、歴史的経験との接続を欠いたまま多重被災を新しい現象として理解することへの警鐘を鳴らすものとしても理解できるように思われる。

もちろん、本研究には、いくつか付言しておかなければならないことがある。まず、本研究で取り扱った事例は、水害事例ないしその後の地域の語りが中心である。言い換えれば、地震や津波のようないわゆる「低頻度巨大災害」というよりも、今回取り上げた事例の大部分は「高頻度小規模災害」である(もちろん、地

域住民にとっては「小規模」ではなく深刻な災害であることに変わりはないが)。このことは、地域や被災住民が自力で立ち直ることのできるレジリエンスの範囲の中で発生した災害(群)である可能性がある。さらなる規模の災害が発生した場合、笑いの形式が維持されるかについては留意すべきである。また、繰り返してはあがあるが、笑いとして語る被災住民が常にその経験を笑いとして語っているわけでもなく、その地域の住民全員が災害を笑いのあるものとして語っているわけでもない。多重被災の経験が笑いの形式を生み出すかは蓋然的であるし、笑いが多重被災の特徴であるのか、この地域特有のものなのかを本稿をもって結論付けるのはやや性急であるように思われる。

しかしそれでもなお、本研究が焦点を当てようとしてきた複数回の水害を経験した被災地区や被災住民の語りの形式における「笑い」の側面は、多重被災を理解する上で重要な示唆を与えるものではないかと思われる。多重被災を理解する上での笑いとは、悲劇と対極にあるものとして捉えられるというよりも、むしろ、悲劇性のただ中であって表現されるものであるからである。一例を挙げても、落語の人情噺、ピエロの涙、チャップリンの主人公……など笑いと悲しみの領域はそう簡単に本来は線引きできないことは、様々な場面で表現されている。「笑い」というレンズを通して多重被災を見つめ直すことは、災害が頻発化する現代において、災害観そのもの、被災経験の多様性、そして復興への理解を問い直すよう促し、歴史的に被災を繰り返してきた過去の知識を照射しながら、新たな視点を提供するものと考ええる。

謝辞

本研究を実施するにあたり、福知山市民、とりわけ大江町蓼原地区・南有路地区、市内城山地区の方には、地域でのアクションリサーチを進めていくうえで、多くの支援や示唆を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

補注

- (1) ある住民は、避難できなかったのは、翌朝の高齢者等避難発令時に、要配慮への避難支援に備えるために「早めに」寝ていたからだ、と語っていた。それは、「翌日が危険だ」という行政や気象台からの情報を「しっかりと聞いてい

た」という皮肉的な笑いとして表現されていた。

- (2) 災害がもたらす地域や人々の語りは、必ずしも悲劇のみで描写されてきたわけではない。例えば、炭鉱労働者を描いた『地の底の笑い話』¹⁾では、炭鉱労働者を描いている。資本主義の元にほとんど強制労働に近い環境下におかれた労働者らにとって、地下労働の中で語られる「笑い話」の重要性が指摘されている。上野は、「笑い話を離れては人生そのものが無に等しいほどだ」(p.23)とも指摘しているように、極限状況下において、自らの苦悩に満ちた人生を語る上で、苦悩と笑いは切り離すことのできないものだと強調されている。

参考文献

- 1) 小滝篤夫・畑中英樹・大門大朗・仁張衛・朝倉聡・児玉裕美・足立泰樹・高橋和利 (2024). 福知山・綾部地域の近年の土砂災害の特徴と災害対応のありかた. 福知山公立大学研究紀要, 9, 87-104.
- 2) 上野英信 (1967) 地の底の笑い話 岩波書店